劉建雲 著

中国人の日本語学習史
——清末の東文学堂

〈学術出版会・二〇〇五年一一月〉

中日両国文化の交流、ないし浸透、融合は、実に歴史が久しく、分野も多岐にわたっています。しかし、これらの研究、特に、ことばの教育史、学習史についての研究は十分とは言えないでしょう。こうした状況の中で、劉建雲氏の『中国人の日本語学習史』が出版されたことは研究史上の大きな貢献となるに違いありません。

本書は、序章、終章を除くと、以下の七章からできています。

第一章は、明清両代中国人の日本語研究の概況と黄遵憲の日本語研究を考察しています。清末までの日本語研究(?)書を総括し、その情報の発信源から分類、論述しているのは、特筆すべき点と言えるでしょう。また、黄遵憲の日本語研究については著者が公平妥当な評価を与えたと思われます。

第二章では、明清両代の官立外国語学校を中心に、当時の日本語教育を考察しています。中国での本格的な日本語教育の始まりを意味する東文館の増設は、中国日本語教育史においては間違いなく注目すべきものです。本章はその設立の経緯や社会背景を分析していますが、史料不足のため、その教育の実際を詳細には述べられていません。

十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、中国では数多くの東文学堂が設立されました。著者はこれを設立者によって、中国人設立のもの、日本人設立のもの、中日共同設立のものと、三分類しています。第三章は清末三種東文学堂の概観ですが、第四章では福州東文学堂、第五章では東本願寺の東文学堂、第六章では北京東文学社を、それぞれ異なったところから考察して、論じられています。

東文学堂に対する著者の定義、綿密な考証に基づいた上海東文学社の創立の史実(創立時期について先行研究への訂正を含めて)、福州東文学堂に対する中日関係史からの著者の見解、東本願寺の東文学堂についての、布教活動と当時の日本対華姿勢からの著者の分析、北京東文学社に対する先行研究を踏まえながら著者の考証などは、興味深く読ませていただきました。

「清末中国人の日本語学習の実態」と題する第七章では、中国人の日本語学習の動機と教育の課題、最初の日本人教師である長谷川雄太郎の日本語教育の実践、時代の特徴を持つ日本語教授法などを論述しています。

著者が、少なからぬ貴重な史料を含む膨大な史料を収集していることには感服します。しかし、社会背景と関連したより深い考察、教育成果と社会的影響に着眼した調査、語学教育への詳しい分析など、期待したい課題がまだ少し残っているのではないかと思います。著者のさらなる研究が待望されます。

(顧明耀)